

平成 15 年 5 月 3 日

雑司が谷旧宣教師館でおはなし会「語り伝えたい童話」

美しい日本語を語る、聞くひとときを楽しむ

本日 3 日（祝）、豊島区立雑司が谷旧宣教師館（雑司が谷 1-25-5）で、かつてこの地で芽生えた児童文化の継承と「おはなし」を語る、聞く楽しさを再発見しようと、おはなし会「語り伝えたい童話」が催された。

明治 40 年にアメリカ人宣教師マッケーレブにより建てられた雑司が谷旧宣教師館は、区内に現存する最古の近代木造洋風建築であり、都内でも数少ない明治期の宣教師館として、平成 11 年に東京都有形文化財に指定されている。区は昭和 57 年に同館を取得し、平成元年から一般公開しているが、館内には、宣教師に関する資料のほか、かつてこの地で花開いた文化にスポットをあてた展示もされており、そのひとつとして、大正時代に目白の地で創刊された日本初の童話童謡雑誌『赤い鳥』を中心とする児童書コーナー（赤い鳥コーナー）がある。

『赤い鳥』は、1918（大正 7）年、当時夏目漱石門下の逸材と呼ばれていた鈴木三重吉により創刊された。有島武郎、芥川龍之介、菊池寛、小川未明、坪田譲治らが童話を、北原白秋、西条八十、三木露風らが童謡をと、そうそうたる顔ぶれが『赤い鳥』誌上に作品を発表し、日本児童文化・児童文学の世界に大きな足跡を残した。そして、当時の目白を含む旧雑司が谷地域には、鈴木三重吉をはじめ、小川未明、坪田譲治、秋田雨雀らが住み、活発な創作活動を展開した。また、『赤い鳥』に続き、自由学園創立者である羽仁もと子が興した婦人之友社より『子供之友』『新少女』が発刊されたのもまたこの地であり、まさに当時の雑司が谷は日本の新しい児童文化の発信地であった。

こうした文化遺産の継承を図ろうと、同館の児童書コーナーには『赤い鳥』の復刻版をはじめ、当時の優れた児童文学作品が置かれ、自由に手にとって読めるようになっている。しかし、あまり利用される機会がなく埋もれた存在となっていたため、「そんなもったいないこと」と、同館をよく訪れるという詩人の小森香子さんが、「おばあちゃんのおはなし会」を発案した。

小森さんは、現在は文京区在住だが、雑司が谷育ちで、当時の生家は小川未明家とも親交があったという。また、詩を書く傍ら、長年ボランティアで朗読に携わっており、リアルタイムで戦争の映像が茶の間に流れる現代だからこそ、日本語の持つリズムや美しさ、心やさしい人間らしい言葉を子どもたちに伝えていきたいという思いを抱いていた。そうしたことから自ら発案し、かつてこの地で芽生えた『赤い鳥』や同時代に発表された童話と詩をテキストに、「おはなし会」を先月からスタートさせた。

2 回目の今日は、小川未明作「野ばら」と芥川龍之介作「蜘蛛の糸」の 2 作品がとりあげられた。戦争のむなしさを静かに描いた「野ばら」は、1992（大正 11）年に赤い鳥社から発刊された童話集「小さな草と太陽」に収録された作品で、反戦と平和を象徴する童話として戦後の小学校国語教科書にも掲載されていた。「蜘蛛の糸」は『赤い鳥』創刊号に発表された作品で、人間の愚かしさを描いた名作として誰もが一度は読んだことがある名作。

小森さんの朗読が始まると、参加者は皆じっと耳を傾け、お話の世界に引き込まれていった。本を目で読むのとは違う、耳から聞くお話に、「イメージが膨らみます」「目をつむって聞いていると、お母さんに抱かれているような気がしました」「聞き終わった後に余韻が残って、気分がいいですね」と、「聞く」楽しさを再認識したようだった。

今回の企画「語り伝えたい童話」は、これから毎月 1 回（第 1 土曜日）開催される予定。「たとえ一人でも続けていきたい」と、小森さんは息の長い活動への意欲を語っている。

◆ 時間：午後 2 時～3 時 会場：雑司が谷旧宣教師館（雑司が谷 1 - 25 - 5）

詳細：雑司が谷旧宣教師館